

動画活用による音楽表現の指導法

－視覚と聴覚から吸収する音楽表現力－

寄 ゆかり*

Teaching Method of Musical Expression by Utilizing Video

－Musical Expressiveness Absorbed from Sight and Listening－

Yukari Yori

【キーワード】音楽表現, 視覚, 聴覚, ピアノ, 動画

Musical expression, Visual, Listening, Piano, Video

1. はじめに

保育者養成校における音楽教育の科目として、ピアノは現在も多く養成校で設定されている。厚生労働省による「保育士養成課程の見直し」（厚生労働省 2017）¹⁾ では、「保育の実践力の強化」および「教科目の教授内容の充実」が見直され、各養成校での教授内容には工夫し、改善されていると言われている。そのような中、音楽指導のうち、ピアノ指導内容については、大きく変化しているとは言い難い。保育者養成校でのピアノ指導の内容については、現在の指導方法が普遍的なものであるという認識は、全体としても未だに多くあるのではないだろうか。これらの指導法に対しては、多くの研究者が疑問を呈してもいる。

辻ら（辻、伊東、安久津 2019）によると、従来型の「練習結果チェック方式」により行われている現状には、ピアノ指導教員自身が、保育者養成でのピアノ教育について理解していない点も指摘している²⁾。その一方で、関連する研究にも「ピアノ指導について」を方法論的追求されるものが多く、ピアノ指導を行うこと自体を課題とすることには、一定、意見が分かれるところであろう。

保育者にとって必要なピアノ演奏力とは何を指すのか。何のためにピアノを演奏するのか。保育者養成校においては「音楽表現」する力を養成する場である。しかし、「読譜」や「技術向上」のみを目的として指導するのであれば、養成校での果たす役割が異なっているのではないだろうか。ここでは、私たち保育者養成校音楽表現教育の教員として、学生に「音楽表現」する力を定着させるための授業の在り方、その考え方、その為にはピアノの何を必要としているのかを、動画の活用からその指導法を明らかにし、追求する。そのことにより、今後の保育者養成校における音楽表現カリキュラム編成の再構築に反映させることを目的とする。

所属および連絡先

* 大阪千代田短期大学

2. 保育での音楽表現の位置づけ

(1) ピアノの活用

もともと、保育においてピアノを用いるようになった歴史的背景はどこからきているのか。日本の保育者養成課程において、ピアノが必修となった歴史を紐解いてみる。幼児教育に関係する方々には周知の事実であるが、明治10年に東京女子師範学校附属幼稚園が開園されるにあたり、1台のピアノを設置されたことが幼児教育におけるピアノを教具として使用した最初だとされている。当時、唯一、ピアノの演奏ができた主任保母松野クララにより、唱歌教育が行われていることが始まりである。その保育の基準となる「保育唱歌教育」による教育の目的は、吉富ら（吉富、三村 2009）によると、身体的発達や精神に与える効用、発音を促すためであったとあるが、そのためには楽器による正しい音程、音楽を伝える必要があり、教具としてピアノが使用されたのである。

その後明治13年、アメリカの音楽教育家メーソン（1818-1896）招聘来日に伴い、教員養成での「ピアノ」が必修教科として確立していった。それから100年以上の時を経ているが、現在の幼児教育でもその当時の教育を基礎としながら、ピアノを教具として用いて行う保育には大きく変化がない。歴史を遡ると、アコーディオン、バイオリンなどで保育を試みることもあったようだが、それはあくまで当時、大変高価であったピアノの代用品でしかなかったのか、現代においてもピアノを有している保育室が圧倒的に多い。

ピアノという楽器は、その音色や表現方法には様々な技術を伴うことはあるが、弦楽器や管楽器など他の楽器と比較すると、誰でも音を鳴らしやすい（と思われる）、ということも保育に用いられる理由のひとつであろう。

幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領（以下、幼稚園教育要領ほかと記す）など、幼児教育の基準となるものはおよそ10年ごとに改定され、音楽で言えば6領域時代にあった「音楽リズム」から大きく発展し、現在の領域「表現」となっている。しかし、保育者養成校の多くでは音楽関連科目として、未だに当然のように「ピアノ」教育を主としている。保育現場の教員からも、「最近の学生はピアノが弾けない。」「練習をしているのか。」といった声を聞く。また、養成校でのそのピアノ指導についても、音楽専門教育を受けた（いわゆる、音楽大学卒業の）ピアノ教師が中心となって担っていることが多く、辻ら（辻、伊東、安久津 2019）は、ピアノ指導を行う教員側の問題も指摘している³⁾。

幼児教育を担う保育者としての音楽の技能は、どの点に焦点を当てるべきであろうか。筆者ら（植田、寄 2014）は、保育現場において保育者が保育を行う時、その表現活動を発展させるためには、子どもの動きを見て即座に判断し、その場に応じた曲のイメージを立てた「即興演奏力」「アレンジ力」が最も必要であると明らかにしてきた⁴⁾。しかし、保育者養成校におけるカリキュラムの現状はどうだろうか。

(2) 音楽表現の授業で何を学ばせたいか

保育「5領域」という考え方をもとに、保育は進んでいく。養成校での授業が各専門分野の教員によって行われるため、学生側は学んだ内容について相互に関連付けながら保育への道筋を立てることとなる。

本学においては、領域「表現」に関する科目も「造形表現」「音楽表現」「総合表現」からなり、それぞれ指導法の科目も有している。

筆者の担当する音楽関連「保育内容の指導法（音楽表現）」では、これまでも『「他領域との関連」という意識付け」をしながら授業展開を行ってきた。授業内では季節の移り変わりや動植物との関わり（領域「環境」）、年齢に応じた語彙力の違い（領域「言葉」）での歌唱曲の選択の方法など、保育の連続性、関連性を意識した授業を展開している。特に「枯葉が散っていく感じてどんなだろう。どんな感じで歌ったらいかな。」「お話するように歌ってみよう。」「歌うときに身体のどこがどんな風に動いている。」と、曲をイメージさせる言葉掛けや、その曲を聞いて感じたことを音で表現する、といった活動を多く取り入れている。

その一方で、前述の辻ら（辻、伊東、安久津 2019）の研究にもあるが、全国的に見てもピアノ授業での現状は、従来型の「練習結果チェック方式」がいまだ主流である。しかしながら、現代の学生たちが練習をしなくなった、と教員側は受け止め、「授業でわかるところまで説明している。」こと、授業時間外での練習がありきで、その成果をもってこなければ「練習してこない学生に問題がある。」となる。奥（奥 2009）は、「教員側がもし、保育者の担う重要な役割と、保育における音楽教育の大切さやピアノの意味を正しく理解していなければ教材レベルでのみ判断してしまうことになる。」と述べている。さらに辻ら（辻、伊東、安久津 2019）によると、ピアノ指導者側の教員自身が保育者養成でのピアノ教育について、理解していない点も指摘している。とはいえ、ピアノ担当者への保育でのピアノ活用方法をどう伝達するかは今後の課題であり、本研究においては、学生への「ピアノによる音楽表現力」の定着方法としての動画による指導法の在り方を追求したい。

例えば、子ども達で歌う場合にも友達と一緒に歌う時、「友達に負けない大きな声で歌おう」「〇〇ちゃんみたいに上手に歌いたい」「『あめふり』の『ぴちぴちちゃぶちゃぶ』ってどんな音、どんな感じだろう。」と領域「人間関係」「言葉」と感受を踏まえながら行っていく。このように行うことで、幼稚園教育要領ほかのねらい及び内容の考え方「各領域に示すねらいは幼稚園における生活全体を通じ、幼児が様々な体験を積み重ねる中で相互に関連を持ちながら次第に達成に向かうものであること、内容は幼児が環境にかかわって展開する具体的な活動を通して総合的に指導されるものであること」に添った保育展開がなされていく、と考えている。

また、『よくわかる保育心理学』では「5領域を相互に関連させながら保育を組もうと考えれば考えるほど、子ども全体に『何をさせるか』という発想になりやすく、逆に、子ども一人ひとりの主体的な活動にこの5領域が浸透しているかという視点に立ちにくくなるということも考慮する必要があるでしょう」と述べられている。保育案を「設定」するとこのような点に陥りやすい。幼児自らが様々な体験を出来るよう、また一人ひとりの特性に応じて対応できる保育を考え、展開できる保育者を育てるためにも、これらの点にも留意しながら授業展開を行いたいと考えている。保育者となる学生には、幼児の心情、意欲に気づき、それらを引き出す力をつけて欲しい。

5領域の関連には、幼児にとって切り離せない「遊び」という視点が重要となってくる。幼稚園教育要領においても第1章「幼稚園教育の基本」において、「（2）幼児の自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習であることを考慮して、遊びを通しての指導を中心とし

て第2章に示すねらいが総合的に達成されるようにすること」と示されている。「遊び」に関しては多くの研究がなされており様々な見解があるが、ここでいう「遊び」から考えるとすれば、筆者は子どもにとって生活、もちろん音楽に関わることをすべてが「遊び」であり、保育者自身がそのような意識をもって保育を行うことが重要であると考えている。音楽においては、例えば子ども達の触れるものすべてが楽器になったり、機嫌のよいときに子どもが鼻歌まじりのオリジナルソングを歌ったりすることは、多くの保育場面において見られる光景である。これらは「遊び」の中から生まれたものであり、設定保育において「設定」されて生まれたものではない。このことを保育者が理解し、場面に応じた展開を行うことにより、子どもの成長を促すことが出来るのではないだろうか考える。

3. 研究の目的

では、以上の音楽活動を行うにあたって、ピアノでは何が必要なのか。筆者は、『読譜力強化』と『練習結果チェック方式』従来型のピアノレッスン』を改編し、「動画活用による演奏」により、視覚、聴覚の両面から理解、認識し、保育に必要な音楽表現を伴ったピアノ演奏力の向上が可能ではないか、という仮説を立て研究することとした。また、保育に活用するための演奏力の向上のためには、ピアノ技術力の向上のみを目的とするのではない。ピアノでの即興的な発想やその場に応じたアレンジ力を定着させるための保育者養成校での指導法、授業カリキュラムの開発に繋げることを目的とする。

4. 方法

研究授業を以下の方法で実施した。

(1) Google ドライブによる課題提出

①日時と内容

今回、コロナ感染防止によるリモート授業下での実施としたため、学生が各家庭での演奏を動画で提出する、という形を取った。

- ・日時：第1回締切 2020年5月1日（金）
：第2回締切 2020年5月8日（金）
- ・対象学生：大阪千代田短期大学2回生 63名
- ・対象科目：器楽活用法Ⅰ
- ・授業内容：1回生終了時に提示した『春期弾き歌い課題』（ピアノによる）を動画撮影し、Google Classroom より提出する。

②分析

演奏動画を提出の際、同時にアンケートを取った。図1のとおりである。このアンケートでは、「4月度『弾き歌い曲映像提出課題』について、映像は何回くらい撮影したものを送ったか」の質問項目に対し回答したものである。今回、コロナ対策としてリモート授業を検討する際、学生への鍵盤所有の有無についてのアンケートを取ったところ、1回生は数名未所有者がいたが、2回生については全員が所

有していた。回答は、

- ①納得するまで 10 回以上撮影した。
- ②納得するまで 5 回前後撮影した。
- ③ 3 回くらい撮影し、その中でよいものを送った。
- ④ 1 回撮影で送った。

の 4 回答とした。

本来は、4 月の授業開始後に実際の対面授業にて「練習結果チェック方式」であったが、今回のコロナ対策でのリモート授業からの延長で、課題を動画提出とした。

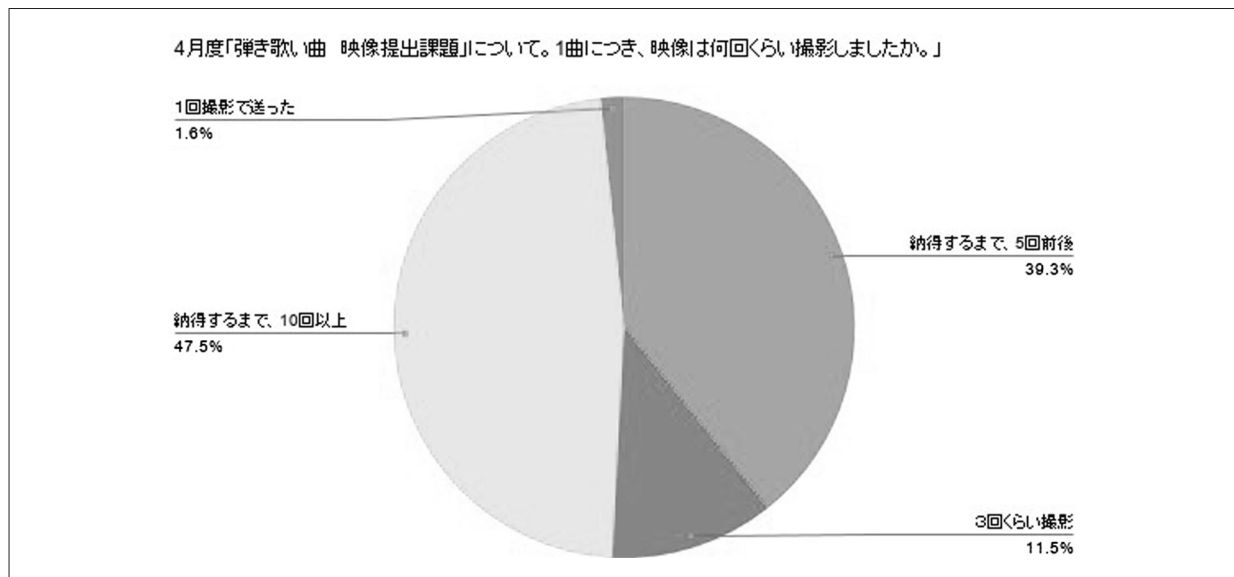


図 1 弾き歌い課題提出に関わる動画撮影数（筆者作成）

結果、毎年、この時期に同様の課題を提示しているが、今年は何より曲の完成度が高かったことに驚いた。これまでの 2 回生では、4 月授業開始でのチェックを行う際には、何とか弾き切る様子が多いが、実際の保育での活用には更なる練習を必要とするものが多くみられた。しかし今回、多くの学生が動画を提出する際に、確認したり、撮影時にうまくいかなかった場合にすぐにやり直しをしたりするなど、今までにない効果が見られたと考えられる。「1 回の撮影だけで送った。」という学生は、わずか全体の 1.6%にとどまり、「納得するまで 5 回前後。」または「10 回以上撮り直した。」の合計では、全体の 90%弱の学生となり、「納得するまで」行っている。また、同様に「弾き歌い曲を演奏する時、注意した点はどのような点ですか。」という質問に対し、「一定のリズムを保つ」「流れを止めない」「アインザッツのタイミング」といった通常、対面授業で指導していることについて挙がっていた。さらに「弾き歌い」において最も指導したい点のひとつ「歌と（ピアノ）伴奏とのバランスを注意した」ということに、自身で気づく学生が多くいた。

これは動画で、客観的に自身の演奏を振り返ることにより表れた大きな効果だと言える。通常の授業において、自身を客観的にみるということが難しく、「子どもの前で演奏した時に今の演奏で子どもたちは歌ってくれるか。」という問いに対しても、学生からの気付きはこれまで少なかった。この動画提出課題提示当初、学生たちによれば、「音を間違えなければよい。」と思って「間違いがあれば自然とや

り直す」ことで自身の動画を確認した、という学生が多かった。しかし、その後、徐々に学生自身の要求度が上昇したことは、今回の実施での効果と言える。

次に、春期弾き歌い課題の達成度についての質問である。図2にあるように、100%もいるが、40～70%の学生が多くいる。これらの学生は、動画提出により教員側が「合格」を出しているにも関わらず、本人たちの意識としては、「100%とは認識していない。」ということである。この回答に対して、今後の研究課題としていきたいと考えているが、直接、聞いたところによると、複数の学生が、「子どもの前で、子どもとともに歌うには不十分であるから100%ではない。」ということであった。これらの回答をしている学生は、演奏技術の高い学生である傾向が強い。自身の演奏に対する到達目標が高いことがうかがえる。

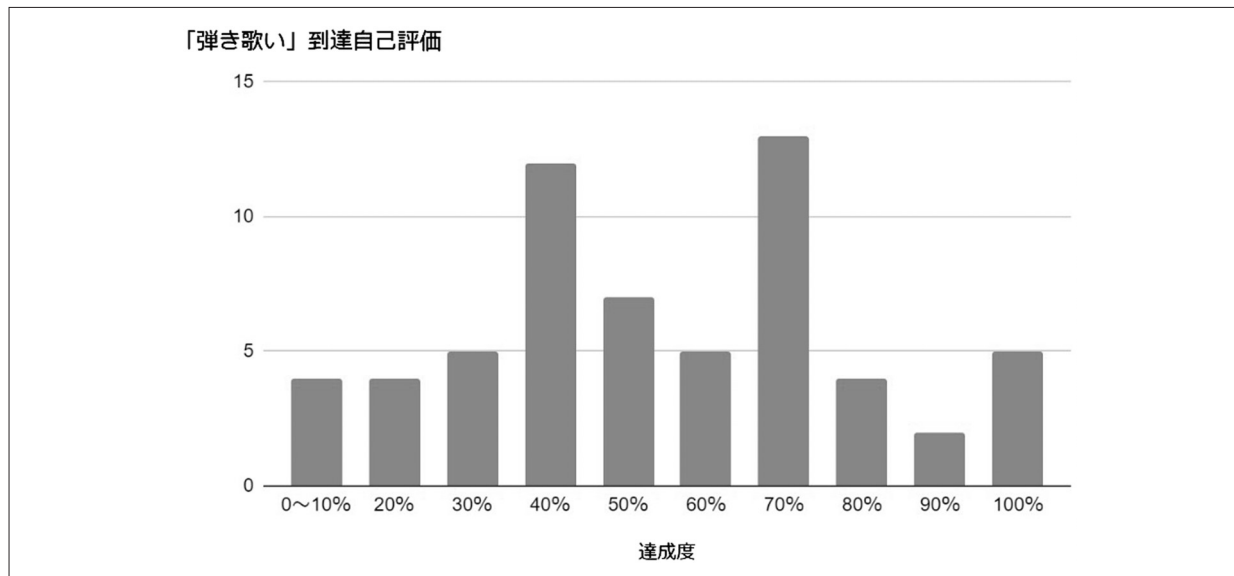


図2 弾き歌い達成自己評価（筆者作成）

（2）動画配信による参考演奏提示と提出

①日時と内容

- ・日時締切：2020年6月30日（火）23：59
- ・対象学生：大阪千代田短期大学2回生 63名
- ・対象科目：器楽活用法I
- ・授業内容：コードによる和音奏動画撮影し、Google Classroomより提出する。

②分析

この動画演奏にあたっては、6月12日（金）対面授業時に楽譜配布、説明を行った。

1回生時に経験しているコード奏をカデンツの形で定着させることを目的とし、幼児教育に頻出する範囲のコードを手の形で覚えることにより、メロディーへの伴奏付けが容易になると考えた。C durが定着すると、他調への移動も簡単に捉えられると考えるのは音楽を専門にしている我々の考えであって、調が変わるごとに新曲視奏と捉える学生たちには、「同じ形を移動させるだけ」であることを視覚で確認させるために、授業での説明後に筆者による参考演奏動画をアップロードした。授業説明時に、「読

譜」「初見」を意識し、配布した楽譜にてその場での演奏を試みたが、即演奏できる学生は皆無であった。

渡会（渡会 2020）は、保育者養成校で学ぶ学生たちの多くは、読譜力がつかないうちにピアノを演奏することにも挑むことになる。読譜ができることは必要であるが、運指力を同時に上達させるために並行して力をつける必要がある。そのために動画が活用できるのではないかと自身が動画教材を作成し、授業を展開している。最近では動画共有サイト（You tube など）に多くの動画もアップロードされており、読譜を苦手とする学生の多くもその動画を参考に演奏をしている姿をよく見る。しかし、渡会（渡会 2020）も述べているが、様々な問題のある動画も多く⁵⁾、自身が動画をアップロードし、教材として活用させているとのことであった。

筆者の担当している学生たちの中には、いわゆる DTM によるピアノロール（長いバーが出てきてその長さに合わせて弾く）や、今や販売されているキーボードの多くに標準装備されている光る鍵盤の場所を追って演奏するなど、異なった意味での努力により演奏を完成させていることも多い。筆者にすれば、それくらいの努力をするのなら、読譜の方が早いように感じるが、色や光などの刺激反応によるものが習得につながる光景もよく見てきている。

さらに多くの学生が、新曲の場合「一度、弾いてほしい。」という。動画共有サイトなども活用しているのは、「音符が読める」としている学生でもある。筆者（寄 2013）の研究においても、読譜と言っても音高（音の高さ、いわゆるドレミ）だけでなく、音価（音の長さ）によるリズム、曲想など読み取る内容は多岐に渡っており、総合的に読譜するには、確かに高度な技能を要する、としている。学生たちの多くが言う「読譜」とは、ドレミが読めることであり、音価まで正しく読める学生までを読譜力があるとする、本学においては全体の 10%に満たないとみている。

筆者が行った参考演奏の動画では、メトロノームに合わせてゆっくりとコード演奏する # b 2 つの長調までのものを載せた。本来は 1 回生時に習得している目標である。しかし定着できていないこと、またそのコードを活用することが本来の目的であることから、習慣的にコードを演奏できる、耳と手で覚えていくことを目標として設定した。今回、このコード奏を課題としたのは、市販の弾き歌い楽譜では、読譜を 1 曲 1 曲と行っていく必要があり、読譜に要する時間と努力を、筆者が掲げる「子どもの表現活動を発展させられる演奏力、その用い方」に集中することを目的としたいと考えたためである。弾き歌いを完成させるためには、自らが獲得しているコードを自由に使い、耳で確かめながらメロディーに合ったコードを選択できるよう、幼児教育で頻出する調を課題とした。

この課題提出に際し、従来の「練習結果チェック方式」とは大きく変わり、学生全員が期限内に提出する結果となった。授業でチェックするというのをこれまで行ってきたが、それであると「できなかった。」「難しい。」などとの意見が出され、今回の提出状況のように 100%の提出はなかった。また、それぞれの完成度が大変高く、ほぼ全員の学生がスムーズに弾き切っているものであった。

但し、学生の多くは、読譜と動画とを結びつけるということはない。読譜力の向上には関係していないが、今回の目標としては達成している。各調で運指は変わることがなく、開始音がわかれば演奏できるしくみを理解できた学生の多くは、今回の課題ではない参考動画のない調であっても、開始音から耳で音を探りながら、カデンツ奏を演奏する姿も見られた。つまり視覚と聴覚で演奏を完成させる

に至っていると考えられる。

5. 考察

計2回の動画を活用した授業を展開したところ、従前の授業とは大きく異なった点がある。それは、演奏曲の完成度が向上したことである。4－(1)の授業では、「自身で撮影した動画を客観的に見ることができる」ということから、全体的に演奏力の向上が見られた。それも、ただ単に「間違えずに弾けた。」ことや「指が動くようになった。」という表面的な技術に囚われるのではなく、「歌とピアノ伴奏とのバランス」を自ら感じ取った学生が多かったということが大きな収穫である。筆者を始めとして、ピアノ指導にあたる教員の誰もが学生に指導してきたことである。しかし、自身が演奏しながらそのことに気付くことができるのは相当、高度な技術であり、初心者にとって「歌とピアノのバランスを気を付けながら弾く」ことには、これまで教員側も期待していなかった事が考えられる。弾き歌いを行う場合、殆どの場合、学生はピアノに集中する。どちらかと言えば、歌は二の次になり、試験等でも声の聞こえない演奏が大半を占める。歌唱の声に合わせて（ほぼ学生の歌唱が小さい声のため）それ以上にピアノの音を弱く弾くことは、困難を極めることである。それが今回の課題提出から、学生の意識に変化が見られた。自分の音を聞いているのである。

さらに言えば、ピアノ両手でのバランスにも注目させたい。低音をしっかりと出して、全体の演奏を支えるなどのバランスに注意を注ぐことができれば、演奏がかなり上達しているといえる。しかしそれはピアノの技術面から、両手の音の強さを変えることは非常に困難だと考えていた。例えば、強くしようとすると、両手で強くなる。片手ずつ強弱に差をつけることは、難しいことである。しかし今回、初心者の中でもこの点に気付いた学生が、自身によって歌とピアノ、右手、左手のコントロールに意識することができた。

例えば今後、動画による客観視ができることを鑑み、自身の演奏と参考動画の演奏とを比較聴取、鑑賞し、相違点に気付かせるなど、聴覚と視覚から演奏力の向上につなげることができるのではないかと考えた。

市販の既成楽譜にも様々なものがある。転回形やベース音が不揃いなものや、曲のイメージに沿った伴奏形なのか、と疑問をいただくものもある。それらを学生たちが精査できるようになるためにも、まずは曲の全体像をつかみ、子どもたちの前で即興的にコード奏などを活用してイメージに沿った演奏を目指すことを目標としたい。

また、4－(1)動画提出後の対面授業では、学生が実際に演奏し、他の学生に感想を求めると、「曲にあったやさしい音であった。」「歌しやすいテンポだった。」など、これまでには発言されなかった、曲のイメージに対する意見が出された。

今回、コロナ対策としてのスタートで、当初は致し方なく取り組んだ面もあった動画課題提出であったが、思わぬ効果を確認できたと考えている。これまで読譜→ピアノ演奏練習→練習結果チェック方式のレッスン という従来型の指導から脱却することは容易ではないと考えていたが、学生の練習に取り組む姿勢も演奏力も向上したことを証明できたと確信している。

4-(2)のコード奏演奏では、理論的に成立しているコードであるが、音楽理論面を理解することより、運動能力的に手が覚える、という手法での実施となった。例えば楽譜に「各調で同じ指番号にて演奏する」ことも記載しているが、これまでは音が変わることにより、そのしくみは崩れてしまう学生が多かった。しかし今回、動画で示すことにより、運指のミスも少ない演奏が増え、指導者側も何度も同じ指導を繰り返すこともなく、また指導時間の短縮など相互に有効な方法ではないかと思われた。但し、前述の渡会（渡会 2020）も述べているが、動画撮影の位置（斜めや真横など）により、その見えにくさなどが理解度にも繋がることから、見えやすい真上からの撮影に注意しながら実施した。この動画を参考にして練習したことにより、学生はテンポ、音を十分に伸ばすといったことも模倣し、丁寧な演奏に仕上がっていたと思われる。

聴覚（響き）と視覚（目で鍵盤の確認）、さらに手の形で覚えることで学生に演奏が定着できたと考えられる。

6. まとめ

従前の音楽授業では、音楽など演習授業では対面授業が基本である、と考えていたこともひとつであるが、動画を活用した指導法を実施した経験はなかった。しかし、今回の取り組みで効果を実感した。今回のコロナ禍の中、リモートでの授業を行いながら、目の前に学生がいない、手元が見えない中でどのようにしたら学生が練習に継続的に取り組むことができ、鍵盤に触れていることができるのかがひとつの鍵であった。「自分を客観的に見ることができる」「その反省をもとに繰り返し演奏を練習する」という効果的な側面から、これからの授業では、定期的に動画提出課題をカリキュラムに位置付けたいと考えている。今回、カリキュラムの改善にもつなげる方向を検討していたため、部分的ではあるが改善していきたい。

また、もともと読譜というとピアノ演奏には必須のものであるが、その点に時間をかけることにより、読譜→演奏という道筋をたどろうとすると、演奏に到達できない学生がいる。また読譜できることにより、保育者養成で身に付けるべき本来の音楽の力となるのだろうか、との疑問から研究が始まった。ピアノ指導者からすれば、読譜のできない学生は演奏できないと思われるであろう。しかし、ブルグミュラーやソナチネといった教則本をしっかりと演奏できる学生が、保育現場での即興演奏力やアレンジ力を必ずしも身に付けているとは限らない。逆に「楽譜がないと弾けない。」「楽譜通りをアレンジするなど難しい。先生の見本を見せてもらったらその通りにする。」という学生がいる。従来型のピアノ授業では、現在のところ即興力を定着させる授業を展開出来ていない。しかし限られた時間数の中で、音楽表現力を身につけさせたい。そのためにはピアノ教則本でどこまで演奏できる必要があるかも筆者自身、長年の課題となっていることである。現状としては、保育現場ではまだピアノなどの鍵盤楽器を主流として保育が行われていること、学生の身近なところでは実習、そして就職試験でもかなり減少したとはいえ、ピアノ演奏を求められる。カリキュラムからピアノを削除する動きも養成校の中ではあるが、周囲の状況を鑑みると、現在はまだ適切ではないと考える。ただ、教則本の活用については、少し柔軟な導入を検討すべきであると考え。また、ピアノでないと音楽表現をすることはできないのか、ピアノ

だけが音楽ではない、という点も筆者が言い続けていることでもある。保育者は特にその傾向にあるようだが、音楽＝ピアノと思っている人も少なくない。

先述のとおり、現場ではまだまだピアノやキーボードといった鍵盤楽器により、保育を行っている現実がある。確かに他の楽器での保育は難しい面もある。冒頭にも述べたが、管楽器や弦楽器では保育者側の習得が容易ではない。また管楽器では、子どもと一緒に歌うことすらできない。日々の音楽表現活動を行うには、鍵盤楽器は最も身近なものであろう。筆者は、日頃よりギターも保育にはよい効果を発揮すると考えているが、音程の定着等は鍵盤楽器が最も適していると考えられている。その鍵盤楽器、主にピアノでどう表現できるか、である。

保育者養成校の学生たちに求められるピアノでの役割は、高い演奏技術力ではない。それよりも即興演奏力やアレンジ力、子どもの表現力を引き出すことのできるイメージにあった音色や音楽を選択する力など、ピアノ専門教育を受ける音楽大学の学生とは異なる。教則本の苦手な学生が、弾き歌いやリトリック曲などをスムーズに演奏する姿も見られる。You tubeなどの動画を活用し、演奏できることで、実習でも暗譜演奏できている、と現場の教員に思われた学生もいる。

明治期以降に確立されたピアノ指導であるが、ピアノの専門家養成ではなく、保育者の養成であることを改めて見直したい。今回、ICT教育の推進、街にあふれるデジタルコンテンツの数々がある中、そのひとつを活用し、教育方法に反映することで効果的な側面を見出すことができた。音楽教育業界でも、様々なアプリケーションを開発しているにも関わらず、筆者自身がそこに目を向けていないと今回、改めて感じている。それは筆者自身も受けてきた従来型のピアノレッスンへの固執があったからかもしれない。人は新しいことに取り組むことには相当な勇気と覚悟を持って挑まなければならないとも感じている。ましてや高等教育の中での取り組みとなると、なおさら改編は時間を要する面もあるが、是非実現したい。そのためには、同じ指導を行うピアノ指導者に、保育現場での現状やそこで保育者になる学生たちにとっての「保育で必要な力」に到達するために習得させたい音楽力とは何を求められているのかを理解して頂く必要もあると感じている。

決して読譜を軽視しているわけでない。しかし、保育者養成ですべき音楽の力の定着には、動画での学習は効果的であることは明らかとなった。ただし、動画と読譜、読譜と鍵盤が繋がるにはまだ、課題は山積である。

今回の研究では、動画提出、参考動画の鑑賞により「自己を客観視できる。」「表現力への気づき」があったが、さらに比較聴取による音色や演奏法の違いに気づき、それを表現できるための指導法などは、追求できていない。これもその場での即興力や、その場の雰囲気に応じたアレンジ力に繋がると考えられる。読譜ができることと動画の有無による演奏力の違いなど、表現力は点数化できないだけに面白いと感じる。いくらでも伸びしろがあり、いくらでも無表情にもなる。明確な点数がでないことで、さらに上を目指すことも何もしないこともある。学生たちの多くが、音を間違わずに演奏することが評価されると思っているところがあるが、これは私たち指導者側の問題でもある。さらにピアノだけでなく、その他の楽器を教具として保育現場で活用する「豊かな表現力を子どもたちから引き出すための保育者の表現方法」の展開をさらに深めるためにも今後の研究課題としたい。

<注>

- 1) 「保育士養成課程の見直し」では、現代社会に対応した科目の充実とともに、「保育者としての資質、専門性の向上」を目指し、「保育者論（講義2単位）」が設けられた。その中では、保育の専門職として実践を振り返ること、学び続けること、子どもの内面的な学びの力を読み取ること等の重要性を掲げている。
- 2) 保育現場では、5領域を中心とした中で音楽は領域「表現」に位置付けられているが、保育者養成校でピアノ演奏の指導にあたるいわゆる教員は、その現状を詳しく知らない。
またピアノ指導としての教育内容、方法の擦り合わせが詳しく行われることは少ないのが現状である。
- 3) 保育者養成校においても、ピアノ科目の指導教員としての多くは、自身がピアノ演奏を専門とした教育を受けてきているものであり、保育現場で必要とされる演奏力とは異なることを教員自身が理解されていないことが多い。異なるとは、ピアノの専門教育で行われているピアノの高度な曲を演奏することよりも、幼児教育現場で求められる演奏力定着とは、曲のイメージを持つ、その場に応じて即興的な演奏ができる、などが必要であることである。しかし、多くのピアノ指導教員は、自身が受けた教育の継承という形を取っている。
また、学生自身の自己学習の上での授業と考えられており、自己学習がない場合は授業そのものが成立しないこととなる。
- 4) ピアノの技術力を持っても、「即興力」は定着しない。保育現場で必要な即興力育成が保育者養成校では必要である、としている。
- 5) 最近の You tube 等の動画では、趣味でアップロードされているものも多く、演奏など必ずしも参考にできるものばかりでない。しかし、学生たちの多くは取捨選択できる力を持ち合わせているとは言い難い部分もある。

<参考文献>

- 植田恵理子，寄ゆかり（2014）「効果音を用いた音楽活動」『全国大学音楽教育学会研究紀要』第25号、pp.47-53
- 奥千恵子（2009）「保育者養成と演奏技法，保育士道としてのピアノ演奏法」『四天王寺大学紀要』第48号、pp.137-154
- 鯨岡峻・鯨岡和子（2004）『よくわかる保育心理学』 ミネルヴァ書房
- 武石みどり（2009）「明治初期のピアノ：文部省購入楽器の資料と現存状況」『東京音楽大学研究紀要』第33巻、pp.1-21
- 辻陽子，伊東陽，安久津太一（2019）「保育者養成課程におけるピアノ指導の意義—最近10年間の研究動向を通して—」『岡山県立大学教育研究紀要』第4巻1号、pp.1-10
- 二宮紀子（2020）「幼児教育学科でのピアノ演奏に関わる授業等での教授法を振り返る—ML教室の活用と読譜力の育成—」『十文字学園女子大学紀要』第50号、pp.123-136
- 幼稚園教育要領（2018）文部科学省
- 吉富功修，三村真弓（2009）『幼児の音楽教育法，美しい歌声をめざして』 ふくろう出版
- 寄ゆかり（2013）「読譜指導—保育者養成におけるリズム指導を考える」『日本学校音楽教育実践学会 学校音楽研究』第17号、pp.287-288
- 渡会純一（2020）「ピアノ演奏技術向上に向けた動画教材の活用の試み」『東北福祉大学，教職研究2019』、pp.163-176